

<b>Title</b>	後世への最大遺物
<b>Author(s)</b>	村松, 晋
<b>Citation</b>	キリスト教と諸学 : 論集, Volume20, 2005.3 : 187-201
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3230">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3230</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

## 後世への最大遺物

村松 晋

### 一、はじめに

今日は「後世への最大遺物」という題目で、お話をさせていただこうと思います。このタイトルは、多くの方がご承知のように、内村鑑三が今から一一〇年前、明治二十七年七月に行つた、同名の講演に基づいています。<sup>①</sup>現在は岩波文庫に収められておりますこの講演は、以来、クリスチャンのみならず、幅広い層に読み継がれてきました。<sup>②</sup>今日は、その内容を繰り返すことが目的ではありませんが、私の関心のありようを明らかにするために、初めに簡単にご紹介したいと思います。

「後世への最大遺物」の精神を一言でまとめるとするならば、それは内村が引いている、天文学者ハーシエルの次の言葉に集約されると思います。「わが愛する友よ我々が死ぬときには我々が生れた時よりか、世の中を少しなりとも良くして往かうじやないか」<sup>③</sup>これがハーシエルの言葉です。自分はこの世に生まれた以上、少なくともこの自分が生きたその分だけは、ささやかながら、この世を良くして行きたい。そのためにこそ、我々は生を授かったの

である。そのための人生である。然らば私は何をこの世に遺していくべきか。何を来るべき後世への贈り物としていくか。このことが講演を貫く内村の問いかけになっています。

内村は後世を益する贈り物として、三つの事例をあげています。すなわちお金を遺すこと、あるいはお金を用いて事業を行うこと、そして自分の思想を文章にして遺すこと、この三つです。しかしお金を遺すことは、場合によつて害をもたらしますし、事業、著述に至つては特別の才能を有する点で、誰にも開かれた道ではありませんから、いずれも「最大遺物」とはいえません。

「最大遺物」というからには、誰にもできて、しかも害がないものでなければならぬ。そう考えた時に成り立つものはないだろうか。こう問い直した内村は、「後世への最大遺物」を、「勇ましい高尚なる生涯」だと定義します。「勇ましい高尚なる生涯」。それは各々が、直面した苦しみや逆境から逃げることなく立ち向かい、それに打ち克つ人生、そのことです。種々の困難を乗り越えてまっとうされた人生それ自体を、後の世への贈り物とする、これこそ、誰にでもできる「後世への最大遺物」にほかならない。内村はこう結論づけています。

私がこの講演を優れたものと思いますのは、先ほどのハーシエルの言葉のような、多くの人に訴えかける、わかりやすい理想を指し示し、それを現実化する方法について、誰もがそれにあずかりうるよう、具体的な道筋を説いているからです。しかもそこで求められる、たゆみなき努力について、後の世まで射程に入れた長いタイムスパンのもと、確かな意義付けを行っているからです。

実に今ほど、開かれた理想に裏打ちされた、一人一人の地道で粘り強い努力が求められる時代はないのではないのでしょうか。今日、自分の話を内村の一一〇年前の講演にちなんで名づけたことの背景には、先の見えないこの時代をどう生きていけばよいかという問題に関しての、私なりの思いが込められています。

二、力の基——「勇ましい高尚なる生涯」をめぐって——

しかしながら、直面した苦難や逆境から逃げず、それを克服する人生そのものを、後世への贈り物にする、しかもそれは、誰にも実践可能な「後世への最大遺物」だといいますが、実際にその精神を自分の生活に適用してみればすぐわかりますように、それは大変に難しいものがあります。

といいますのも、私たちに課せられる苦難や逆境というものは、肉体改造のためのトレーニングとか悟りを求めるの苦行といったケースのように、みずから求めて得た苦痛とは本質的に異なっており、こちらの都合に関係なく突然に、しかも日常生活のど真ん中に突き刺さってくる具体性、迫真性にこそ、その特徴を持っているからです。

自分の存在をおびやかすような苦難や逆境に陥った際、我々が陥りやすいのは、アクシデントに巻き込まれたことを呪詛するあまり、「俺は悪くない」と人に責任を押し付けたり、「なぜ私が」と憤ったり、「自分は関係ない」と渦中にある人を見棄てたりすることですが、しかし、それらはいずれも苦難からの逃避であり、苦難への敗北だといわなければなりません。「勇ましい高尚なる生涯」とは、自分が対峙することを強いられた困難のさなかにあつて、むしろ進んで重荷を負い、傷ついた人と共に歩んで犠牲を負い遂げること、これこそ苦しみから逃げずに打ち勝つことを意味するものであり、またそうした生の積み重ねこそ、問題の山積する現代において、最も求められるあり方だと私は考えます。

しかしそれはどうやったらか可能でしょうか。これが問題です。限界状況に追い込まれば、それこそハーシエルの言葉に受けた感銘など吹き飛んでしまうのが普通です。それとも「後世への最大遺物」を生きることが、不撓不

屈の精神の持ち主に限られるのでしょうか。そもそも内村の言葉とは、そんなにも読者を限定するものなのでしょうか。

もちろん、そんなことはありません。この点、「後世への最大遺物」では前面に押し出されてはいませんが、内村は、人間、気合や根性で「勇ましい高尚なる生涯」を送ることができるとは毛頭考えていませんでした。たとえば内村鑑三の教えを受けた一人で、信仰に根ざした法哲学や国家論を講じ、その存在と言葉によつて、時代の学生間に強い求心力を放つた三谷隆正が、今から七十四年前の昭和五年五月二十九日、すなわち内村鑑三が亡くなつて間もなく開かれた「内村鑑三先生記念講演会」において、「内村鑑三先生との初対面」と題し、次のように述べているのが示唆に富んでいます。

三谷が内村に初めて会つたのは、明治の終わり、彼がまだ高等学校の学生であつた頃で、先輩に連れられて内村を訪問したわけですが、このとき内村は集まつた学生たちを前に、こう尋ねたそうです。「いつたい何が人生に於いて一番大切なものと思ふか」。この問いかけに対し、最前列にいた、三谷の先輩のある人物が次のように応じました。「道といふやうなものが一番大切なものと思ひます」。道、すなわち人生の理想です。それを聞いた内村は、果たして何と答えたか。「ウム、道も大切である。然し道より以上に、その道を歩く力が大切であらう！」内村はこう述べたというのです。

三谷はこの言葉を、「先生の信仰の中心に触れるもの」として、恩師の激動の生涯、まさに内村の「勇ましい高尚なる生涯」を回顧するなかで、次のように述べています。

「先生のあの戦闘力は決して意志やふんばりから出たものではありません。さういふ人間的な力みから出たものではありません。……先生は幾度か難路に逢着してせんすべを知らず、殆ど絶望に近き心持を抱いて、倒

るゝが如くに基督の十字架に縋りつかれました。さうして唯ひとり父にもいふ幼児の如くに、天の父に訴へ、願ひ、祈られました。さうしてその結果力を得られました」。

内村の力の源泉は、「基督の十字架」にあつた——実に三谷がここで見抜いたものは、先の疑問、私たちが逆境に直面しても、それに負けずに生きぬいていく「勇ましい高尚なる生涯」を送る力をどこから得るかという問題への真正面からの答えとなっています。

三谷は「先生のあの戦闘力」という強い言葉を使っていますが、内村のみならず、私たちにとつても生きることは戦いです。特に内なる戦いです。苦しみのさなかにおかれると、極限状況だからこそ、奇麗事ではない自分の本性が現れてきます。しかしその本性の赴くままに、「自分は悪くない」と責任転嫁に陥ることは苦難への敗北です。様々な葛藤、ねたみに駆られ、憎悪や嫉妬の炎を燃やすことも同様です。まさに内なる戦いです。

そんな熾烈な戦いに打ち克つにはどうしたらよいか。苦難のなかで、深く己を反省し、もう一度出直す勇氣はどこから与えられるか。犠牲を負い遂げるなかに、真の自由を、喜びを、見出せるようになるにはどうしたらよいか。三谷によれば内村は、その力を「倒るゝが如くに基督の十字架に縋りつく」ことで得たといいます。それは一見逆説です。無力の極みで力を得るといいますから。しかしここに私たちの人生にとつて最も重要なことが語られていることが予感されると思います。この「基督の十字架」をめぐる内村の逆説に、私たちはどうしたらあずかることができるのか。この問題こそ人生の $\alpha$ であり $\omega$ にほかなりません。

### 三、いじま礎——打ち砕かれた魂——

この点、示唆に富む言葉がありますので初めてご紹介したいと思います。晩年の内村の教えを受けた人の一人に、岩島公いわしまという国語の先生がいらつしやいますが、この方が自分の幼いお孫さんに創世記のヨセフ物語を説き明かした作品中、あとがきでこういうことを言っております。

「このヨセフ物語が本当にあなたがたの心にしみて役立つ時はいつだろう。それは意地悪のようだけれど、

あなたがたがいつか、悲しいことにあつて、泣いて、泣いて、泣きぬいて、もう生きてはいたくないと思う時、  
そういう時です」<sup>(16)</sup>

この言葉はヨセフ物語に限らず、聖書がわかるるときとは一体どういう時なのか、いいかえれば「聖書がわかる」という言い方における「わかる」ということは一体、どういうことなのかを的確に示しています。すなわち聖書の世界が開示する諸々の問題は、その人が「生きてはいたくないと思う」ほどに身を震わせざるをえない、ある否定的な体験のつぼを通してのみ示されるものだということです。決して机の上で理解されるものではないということです。その意味で否定的な現実においてこそ、私たちは神に最も近づいているのだということができます。

しかしここで特に注意しなければなりません。確かに私たちは否定的な現実を媒介として、聖書の世界を示されます。ただ、信仰を求める人が陥りやすい落とし穴として、私自身の自戒を込めて強調しなければならぬことは、たとえば日本でも昔から「ボロは着ても心は錦」「武士は食わねど高楊枝」といいますように、人間というものは否定的な現実に進み込まれば進み込まれるほどに、おのずから自分の内なる精神性をよりどころ

とし、己の正当性を守り抜こうとするものだということ。

それは一見、気高い立場に思われもします。しかしそのような自負心なり精神性なりを自分の最後のより所にしていくと、言葉は悪いかもしれませんが、ついに苦しみの中で悩むことそれ自身に酔いしれてしまう、いわば「泣いて、泣いて、泣きぬいて、もう生きてはいたくないと思う」ことそれ自身が、その人の自尊心を護る最後の砦として死守されてしまう、そういう極めて手の込んだ、自己執着に陥ってしまふ場合があります<sup>16</sup>。

そんなところでたとえ泣くことがあつたとしても、そこで零れ落ちた涙は本質的に「悔し涙」であり、根底にすえられているのは結局、「なぜ自分だけが」と自己を正当化しようとする頑<sup>かた</sup>な心です。岩島氏のいう「泣いて、泣いて、泣きぬいて、もう生きてはいたくないと思う時」とは、そういう悔し涙にまみれたあり方ではありません。悔し涙を出させていた自分の最後の砦、すなわち自己正当化しようとする心をも無条件に差し出さざるをえなくされるとき、一言で言えばこの「自己」、この頑<sup>かた</sup>な自己が砕かれた時、そのときです。

それでは生来頑<sup>かた</sup>なこの自己、手を替え品を替え、自分に執着しようとするこの自己が、ついに破却されるのはいつでしょうか。これこそ最大の問題となりますが、ここで私はヒルティがその『幸福論』で、カーライルにことよせて述べていることを想起いたします。カーライルはこう言っています。「心の満足を得る最良の方法は、自分は絞首刑に処せられるのにふさわしい者だと自ら思うことである。そして、これはおそらく本当のことかも知れないのだ<sup>17</sup>」。

ヒルティはこう引用していますが、我々にとって決定的なのは、それが「かも知れない」ものとしてではなく、まぎれもなく「本当のこと」であるということ、ほかならぬこの自分こそ、本来なら「絞首刑に処せられる」のが当然な人間なのだ、それは「本当のこと」なのだということを、心底、思い知らされること、そのことです。



自分で無理してそう思い込むではありません。そうではなくて、あるとき、ある具体的な出来事をつうじて、他の誰でもない、まさにこの自分が、本来なら「絞首刑に処せられる」のが当然な人間なのだ、「それは本当のこと」なのだということをお容赦なく突きつけられるのです。逃げ場がない所にまで追いやられるのです。とどめを刺されるのです。

そのとき私たちは、そのような厳格な宣告に対してなお如何ともし難い、このどうにもならない自己の現実には苦しむなかで、ただただ、このどうにもならない自分を赦してください、助けてくださいと呻かざるをえなくなります。それこそ三谷が内村を評していったように「倒るゝが如くに基督の十字架に縋りつ」くほかになす術がありません。

私たちのなかに最後の最後まで残っていた自己弁護、自己正当化の思いが、完膚なきまでに叩き潰されるのはこのときです。逆にいえば、そのように絶体絶命の場にまで追い込まれ、後生大事に抱えてきたこの自己を、無条件に投げ出さざるをえなくさせられるまで、自己の問題はついに解決されないということです。

実に、このとき私たちが心くずおれて流す涙、これこそ、「基督の十字架」への唯一の合鍵だといわなければなりません。この微塵も自己主張というものがない、本当に心くず折れたところから零れ落ちる涙をとおしてのみ、私たちは聖書の世界、ことに「基督の十字架」の意味を知らされます。その意味とは、先のカーライルの言葉でいえば、「神の前に縛り首にあつて当然の存在である」自分のために、神がどれほどのことをなされたか、どんなに有難いことが自分のために起こったのか、まさに *amazing grace* としかいいようのない厳肅な出来事にほかなりません。信仰とは要するに、「この「赦してください」という絶体絶命の呻きの底で、この *amazing grace* を知らされることです。

そしてそのとき、私たちの心の底に現出する根源的な転回こそ、キリスト者のすべての活動の原点にほかなりません。なぜなら私たちは、「本来なら縛り首になって当然な人間なのだ」「それは本当のことなのだ」という呻きをくぐりぬけた、「赦された者」としての自覚に徹することによってのみ、犠牲を負うなかに真の自由を見出す者に造り変えられるからです。また己の生命の根拠を、「十字架の出来事」という、この世を超えた絶対的な出来事に見出すことを余儀なくされてのみ、この世的には見栄えのしない、むしろ惨め極まりない場に置かれても、周囲のあなどりや心無い批判に屈せずに、信じた道を歩む者とされるからです。

このように申しますと、「キリスト者がたまわる力とはそんなものか」という声も出てくるかもしれませんが。しかし、この生来、どうしようもなく利己的で、損得勘定でしか現実を意味づけられない自分が、問題の山積する現実を、ほかならぬ自分の働きかけを待つ場所として、それこそ神に課せられたものとして受け止め直すことができる瞬間があるということ、そして苦しみに面して責任転嫁に陥るのではなく、逆にそうした状況を招いた一因としてむしろ自分をこそ反省するなかで、重荷を負うことに自由を見出せる者にされるということ、このこと自体、どんなに努力しても得られない喜びであり、既に力そのものであることは、自分が「神の前に縛り首にあつて当然の存在であること」「それが「本当のこと」であることを示されて呻いた人であるならば、誰しも肯定してくれるもの」と思っています。

#### 四、おわりに——三谷隆正「最大の業績」が語りかける世界——

とはいえこうした出来事に一度あずかってしまえば、以後、信仰は「安泰」で、後は揺るぎなく「勇ましい高尚

なる生涯」を歩むことができる、そう考えたとすれば、それは現実に即しているとはいえません。キリスト者にとつて経験を重ねていくということは、先ほど引用したカーライルの言葉、すなわち自分は神様の前に「本来なら縛り首になつて当然な存在だ」ということ、「それが本当のことである」ということ、この何ともならない自己の現実に對する実感を、年々歳々、深めていく、その苦悩のみちのりであり、ゆえにこそ、その都度、十字架の出来事に追いやられていく、十字架の出来事のほか、真に寄り恃むものを見出せなくなつていく、そうした絶望と希望のダイナミズムだといえます。

内村はキリスト者のそのような現実を的確に表現しようとしてのことと思ひますが、「義とせられた」という言い方より、「常に義とせられつつ行く」という、「進行形」の言い方をあえて使ひ、またあるところでは「余は食物を要する如くにキリストを要する、日光を要するが如くにキリストを要する」と述べています。実によく納得できる表現であると思ひます。自分の実感としても、人間にできる唯一の能動的な行為とは、結局、内村が『求安録』の末尾「最終問題」で描写した、祈ることすら乞ひ願わねばならない「赤兒」<sup>あかご</sup>、その「赤兒」<sup>あかご</sup>の泣き声に唱和すること、そのみではないのかとの思ひがますます強くなつていきます。

このように述べますと、そんな生涯の繰り返しのごとが「勇ましい高尚なる生涯」になるのだという問いがあらためて出されるかもしれません。こうした疑問に對しては、先ほど言及しました三谷隆正が述べていることをご紹介して結びにかえたいと思ひます。

三谷は昭和三年三月、題名、内容ともに、内村の「後世への最大遺物」を意識したと思われる、その名も「最大の業績」と題された文章のなかで、「マタイによる福音書」二五章三二節から四〇節に受けた感銘を語っています。その場面はイエスが再臨の日に裁きの座について、あたかも羊飼いが羊とヤギをわけるように、義人と罪人とに分

けるところにあたっています。三谷はそこで義人とされたものが、その評価に驚いて、「自分は誉れに値することなど何もしていない、私はとてもそれに値しない」とイエスに尋ねざるを得なかつた事実の意味を問い直してこう言っています。

「寔に最も価値のある、深い意味のこもる仕事は、人の意識しないやうな、それほど没我的な純真な働きのうちになるものゝやうであります。青史にその跡をとゞめて居るやうな歴史的偉業でも、その最も意味深きものは、偉業と意識せられずしてなされたるが如きものであります」<sup>(2)</sup>

思うに人の業績には、意識的なものと無意識的なものがある。そして、真に価値ある業績とは、意識的な仕事のうちにはなく、逆にその人がそれと意識しないうちにこそ成り立っているものではないか。三谷は再臨の日の光景を問い直すなかで、私たちの「常識」に揺さぶりをかける言葉をつむいでいきます。

しかし三谷がこう述べるのは、単なる思いつきによるものではありません。一体なぜ「最も価値のある、深い意味のこもる仕事は、人の意識しないやうな、それほど没我的な純真な働きのうちになる」のか。三谷は言います。「何故なればそこでは神が我等に於いて働きたまふからであります。然り、神のみが働きたまふからであります」<sup>(2)</sup>。こう述べる三谷は続けてさらに一体どんな時に「神が我等に於いて働きたまふ」のか、実に肅然たらざるをえない慰めの言葉を語りかけています。「神が我等に於いて働きたまふ」時、それは、

「我等自身が、みづからを神の器として意識してゐないやうな時、然し謙遜にして真摯である時、神は我等に於いて最も純真な神の聖器を見出し給ふのであらうと考へます。何故なればさういふ時こそ、我等は真個に謙虚であり、謙虚であるだけそれだけ神の聖器たるに適して居るでありませうから」<sup>(2)</sup>。(傍点引用者)

三谷がいう私たちが「みづからを神の器として意識してゐないやうな時、然し謙遜にして真摯である時」それは

どんな時なのか、もはや繰返すまでもありません。そして三谷はこう讚美の声をあげるのです。

「故に我等が終に聖なる審判の台前に立つ時、恐らくは我等の罪深き弱さを以てしてなほ、我等が驚くやうな重大なる役割を我等自ら演じて居りし事を見出さしめらるゝのでありませう。その時我等は心より神の深き智恵を讚美し、ほまれを神御自身にのみ歸して悦び踊ることでありませう。何故ならば、神は我等の知らざる間に我等を用ひ給うて、いみじくもおほいなるみわざを成し就げたまひつゝありしのでありますから。是が眞個の成功であります。人生は以上の立身出世はありません」。

「眞個の成功」「立身出世」という言葉は「明治の青年」たる三谷の息吹を感じさせますが、私はこの「最大の業績」という短文は、おそらくその若き日に、『後世への最大遺物』を読んで志を立てたであろう三谷の、壮年期における実に深い応答だと思えます。

冒頭に引用した一節、「わが愛する友よ我々が死ぬときには我々が生れた時よりか、世の中を少しなりとも良くして往かうじやないか」、このハーシエルの言葉に集約される、「後世への最大遺物」の精神は、三谷の語るこの厳肅な慰めに裏打ちされることにより、一層、深い輝きを見せてくれるものと思ひ、最後にご紹介した次第です。私の述べたことには限界も多々あったと思いますが、自分のたどってきた歩みに基いて率直にお話させていただきました。ご静聴を感謝いたします。

内村鑑三記念キリスト教講演会における講演

(二〇〇四年三月二十八日 於日本女子大学桜楓館ホール)

註

- (1) 明治二十六年から二十八年にかけて、内村は『基督信徒の慰め』『求安録』『余は如何にして基督信徒となりし乎』等の重要な著作を次々に発表した。相次ぐ出版の背景には、内村が明治二十四年のいわゆる「一高不敬事件」により「流竄」の日々を余儀なくされ、心身ともに「どん底」に置かれていたという現実がある。内村の生涯において決定的であったこの時期の消息・その実存の軌跡に関しては、松澤弘陽「近代日本と内村鑑三」（日本の名著38『内村鑑三』中央公論社 昭和五十九年）、新保祐司「内村鑑三」（構想社、一九九〇年）に詳しい。
- (2) 「後世への最大遺物」が放った思想的磁場の諸相に関しては、鈴木範久『内村鑑三日録 後世へ遺すもの』（教文館、一九九三年）を参照。
- (3) 内村鑑三「夏季演説 後世への最大遺物」 便利堂 明治三十年（『内村鑑三全集（以下、『内村』と略記）』第四巻 岩波書店、一九八一年、二五五頁）
- (4) 同右（同右、二八〇頁）
- (5) この点、精神科医として知られる神谷美恵子は、その著書のなかで、『後世への最大遺物』を引用し、「自己に与えられた生命をどのように用いて生きて行くかというその生き方そのものが、何よりも独自の創造でありうる」となし、「何かそれまでになかった新しいものをつくり出すことは、とりもなおさず自分の生きているしるしであり、自分の生命の意味をたしかめること」として、「これはだれの手にも届く生きがいである」と述べている（神谷美恵子『生きがいについて』みすず書房、一九八〇年、九〇頁）。
- (6) 三谷隆正（明治二十二年〜昭和十九年）の生涯と思想・信仰については拙著『三谷隆正の研究——信仰・国家・歴史——』（刀水書房 二〇〇一年）を参照のこと。
- (7) 「内村鑑三先生記念講演会」は昭和五年五月二十八日、二十九日の二日間にわたり、東京青山会館で行われた。講壇に立ったのは矢内原忠雄、塚本虎二、畔上賢造、金澤常雄、三谷隆正、黒崎幸吉、藤井武の七人である。
- (8) 明治末期、第一高等学校の校長をつとめていた新渡戸稲造は、己が信仰を学生に直接説くことはせず、志ある者を内村のもとに託すかたちをとった。本文で引用した三谷隆正は、そうした新渡戸「經由」の内村門下生の一人であった。同時代において、内村に魅せられた学生は少なくないが、新渡戸を経ているか否かは、同じ一高生であっても、その

- 思想の質を問い直す上で、重要なメルクマールになるように思われる。この点、示唆に富む論考として、松井慎一郎「新渡戸・内村門下の社会派官僚について」（『日本史研究』四百九十五号 二〇〇三年十一月）を参照のこと。
- (9) 三谷隆正「内村鑑三先生との初対面」『永遠の生命』昭和四年八月号（『三谷隆正全集（以下、『三谷』と略記）』第四卷 岩波書店 昭和四十年 一四七頁）。ちなみに『永遠の生命』は、黒崎幸吉の個人伝道雑誌である。黒崎は三谷の先輩にあたり、住友勤務の後、伝道生活に入った。黒崎については前掲拙著『三谷隆正の研究——信仰・国家・歴史——』の一七二―一七三頁を参照のこと。
- (10) 同右（同右）
- (11) 同右（同右）
- (12) 同右（同右、一四八頁）
- (13) 同右（同右、一四九頁）
- (14) 岩島公は、その作品「おばへの手紙」昭和四十九年（岩島公「おばへの手紙・孫へのヨセフ物語」キリスト教図書出版社 一九九三年）によれば、明治三十九年、岐阜県大野郡丹生川の農家に生まれ、大正十四年東洋大学専門部倫理学東洋文学科に入学後は、「希望社」の後藤静香に師事し、「日本を救う」べく、「希望社運動」に熱中するが満たされず、昭和三年、友人のすすめで「ふとついで行つてみ」た内村の聖書研究会での体験が契機となって、キリスト者としての歩みを始めた。以後、五〇年にわたる国語教師としての実践のかたわら、矢内原忠雄の励ましをうけたこともあり、昭和二十一年五月から、自宅にて聖書集会をはじめ、同三十七年十二月からは個人伝道誌『永遠の日本』を隔月刊で発刊し、以後三十七年間継続した。著書に『岩島公著作選集』全三卷（キリスト教図書出版社、一九九九年）がある。
- (15) 岩島「孫へのヨセフ物語」昭和五十二年（『おばへの手紙・孫へのヨセフ物語』一七五頁）
- (16) この問題をつきつめた論考の一つとして、『死に至る病』の「絶望して、自己自身であろうとする絶望、反抗」が指摘できるのはいうまでもない。
- (17) カール・ヒルティ『幸福論』第一部（岩波文庫、一九三五年、八三頁）
- (18) 内村鑑三『羅馬書の研究』第十九講 神の義（三）三章二十三節、二十四節の研究 向山堂書房、大正十三年（『内村』第二十六卷 岩波書店、一九八二年、一八二―一八五頁）

(19) 同右「余がキリストを要する時」『聖書之研究』第一三〇号 明治四十四年五月(『内村』第十八卷 岩波書店、一九一一年、一二五頁)

(20) 同右『求安録』 末尾「最終問題」 警醒社書店 明治二十六年(『内村』第二卷 岩波書店、一九八〇年、二四九頁)

(21) 三谷隆正「最大の業績」『永遠の生命』昭和三年三月(『三谷』第一卷 岩波書店、昭和四〇年、一七三頁)。なお本論と同趣旨の文章として、「警が手引きした話」『日本聖書雑誌』昭和八年八月(『三谷』第五卷 昭和四十一年)がある。ちなみに『日本聖書雑誌』は畔上賢造の個人伝道誌で、三谷もしばしば寄稿していた。畔上と三谷の関係については前掲拙著一七〇〜一七二頁を参照のこと。

(22) 同右(同右 一七四頁)

(23) 同右(同右 一七三頁)

(24) 同右(同右 同右)

(25) 本年の内村鑑三記念キリスト教講演会における司会、講師、演題、また各講演に先立って歌われた賛美歌、朗読された聖書の箇所等は以下のとおりである(敬称略)。

司会…下山田誠子 奏楽…白石光隆

賛美歌…第二編一番、四二〇番、五一五番(斉唱順)

聖書朗読…詩編三十三編八節〜二十二節

講師…村松晋「後世への最大遺物」

加納貞彦「ネットワーク社会の展望」

山本俊樹「パウロと内村鑑三」(講演順)